

ようこそ 幸手のまちへ

私たちのふるさと幸手市は埼玉県の北東部に位置し、千葉・茨城両県に隣接しています。

江戸時代には幕府の直轄領として、利根川江戸川水運の要衝地であり、新田開発による農業も盛んな土地でした。日光道中第6番目の宿場町でもある幸手宿は江戸に近く人や物資の往来も活発であったといわれています。



平井家
(大正11年築)

幸手市「ふるさと伝承の会」
会長 増田 幹男
監修 前市史編さん室長
浜野 一重



⑨妙観横町（日光御廻道入口）

この奥に妙観院がある。御廻道は天保の頃、将軍が日光社参の時に、幸手栗橋間の出水で日光道中が通行不可能となった場合、幸手宿から鷺宮・加須大利根へ馬蹄状に迂回して栗橋宿へ出る道である。

⑩雷電神社

幸手が田宮の庄といわれていた頃からの古社である。田んぼに雷が落ちた所に神社を祀ったといわれている。



⑪聖福寺（芭蕉句碑・勅使門）

「幸手を行ハ栗橋の関 芭」
「松杉をはさみ揃ゆる寺の門 良」
元禄2年（1689）3月、松尾芭蕉は「奥の細道」へ旅立った。4年後に江戸深川芭蕉庵で十三夜連句を催した折、幸手を思いだし同行した弟子曾良とこの句を詠んだ。

山門は勅使門で、市指定の文化財となっている。徳川幕府の将軍が日光社参の折には、この寺で休息された。



⑫浅間神社

江戸時代、幸手宿第一の豪商長島屋が再建したといわれている。その年に生まれた赤ちゃんが、額に「朱印」を頂き、「旗きり飴・葱・団扇」などの縁起物で健やかな成長を願う「初山」が毎年7月1日に行われる。

⑬橋守部の碑

江戸後期の国学者で、29才から20年間幸手に在住し、のち江戸に移る。天保の四大国学者の一人で『万葉集古事記・日本書紀』を独自に研究し本居宣長と学説を争った。



幸手一色氏について

古河公方の重臣。足利泰氏の子公深が三河吉良荘一色に住んだのにはじまる。公深は、元徳1年（1319）父泰氏の遺領であった幸手に移ってきたともいわれている。

幸手一色氏の系統のなかで代表的な人物としては、一色直朝が挙げられる。直朝は和歌を愛で、絵を嗜む東国武将きっての逸材である。幸手周辺には直朝が開基した寺院や神社が数多く残されている。